

日本生まれの外国にルーツを持つ子どもが継承語を学ぶとき —継承語不安とその解消に注目して—

中家晶瑛（上智大学大学院院生）

1. はじめに

日本社会では、外国にルーツを持つ子どもは、学齢期に来日し日本語能力に言語的課題を有する子どもが真っ先に想定されることが多いが、当然ながらその中には日本語支援が不要な子どもも存在する。その子どものうち、たとえば外国出身の両親のもと日本で生まれ育った外国にルーツを持つ子どもは、日本語を第一言語とし、日本社会で日本の学校教育を受け、「日本人」として生きていることから（渋谷、2013）、外国にルーツを持つものの日本語能力において全く問題はない。しかしその中には、親の母語、つまり継承語に言語的課題のある子どももいる。親の母語（継承語）は、良好な親子・家族関係やアイデンティティ形成といった情緒的側面において重要とされているにもかかわらず（中島、2016）、彼らの全てが、継承語能力を有するとは限らない。親の方針や社会・経済的理由から、家庭内外で日本語のみの生活を送り、親の母語である継承語を身に着けられなかった子どももいる（Nakamura、2016 など）。本研究は、このような背景を有する外国にルーツを持つ子ども¹⁾は、どのように継承語学習に向かい合ったかその過程を情緒的側面から明らかにすることを目的とする。また、本研究の意義は、外国にルーツを持つ多様な子どもの継承語習得の実態を広く提示することにある。

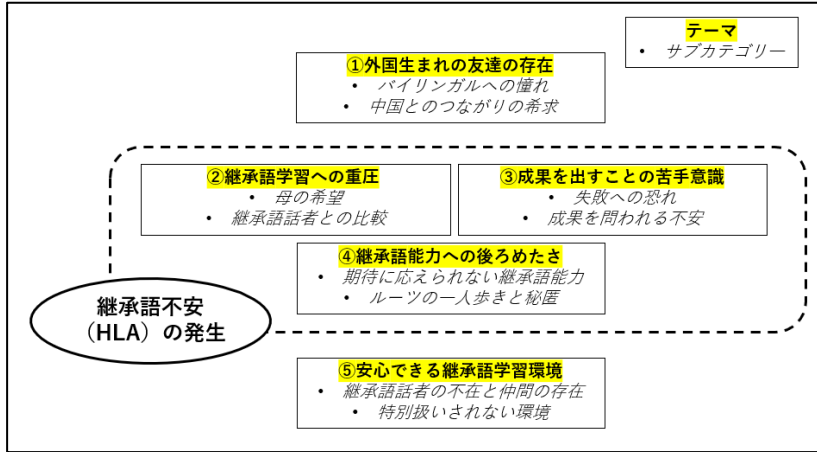
2. 研究方法

本研究の対象者は、中国帰国者家族である背景を有する中国出身の両親のもと、外国にルーツを持つ子どもとして日本に生まれ育ったMさん（女性・20代）である。Mさんは、日本語を第一言語、中国語を継承語とする。Mさんを本研究に選定した理由は、継承語である中国語能力をあまり有さないことに関する情緒的な語りとその変遷が見られたこと、また外国にルーツを持つ子どもの集住地域で生まれ育った経緯を有していたことである。Mさんの家庭環境は以下の通りである。Mさんは、祖父母含む親戚が全員来日し中国に親戚が居なくなったため、中国に行った経験はない。家庭内で両親は中国語で話し、父親は日本語がわかるが、母親は日本語があまり話せない。Mさんは父母間の中国語は少し聞き取れるが、中国語を話すことはできない。そのため、小学校高学年の頃に中国語学習を開始したが、すぐにやめたという経験がある。また、Mさんの学校生活に関しては、外国にルーツを持つ児童生徒が多い地域の小中学校に通い、周囲には外国生まれで学齢期に来日した友達が多かったという。Mさんのように日本生まれの子どもも、親の母国と往来をしていることから、継承語能力を有しており、Mさんの周囲は、継承語能力を有する子どもが多かった。高校・大学はほとんどの生徒・学生が日本人の学校に通った。調査方法として、非構造化インタビューと半構造化インタビューを2回実施した（2022年2～7月）。そこでライフストーリーを語ってもらい継承語に対する考えや思いを聞いた。インタビューは録音し、文字化したものを調査対象者に確認してもらった。分析方法は、ハイブリッドアプローチによるテーマ分析（土屋、2016）に基づき分析した。テーマ分析は、質的データの中にテーマを見出す体系的なプロセスの分析手法であり、特にハイブリッドアプローチは、帰納的分析から生成されたテーマを既存の理論を用いて解釈する方法である。分析単位が一つの場合に用いとされて

いることから、本研究に適するアプローチと考えた。

3. 結果

図 1. 時系列に示したテーマとサブカテゴリー



分析結果から、Mさんは小学生時代に外国生まれで親の母語を話せる友人やいとこの存在から、Mさん自身も継承語を話せるようになりたいと思い（テーマ①）小学校高学年に中国語学習を開始したが、断念した。その背景には、周囲の期待や重圧（テーマ②・③）があった。さらにMさんは、中国のルーツがあることで中国語能力を期待さ

れてしまうことに困惑し（テーマ④）、自分のルーツを隠すようになった。このようなMさんの学齢期の経験からは、継承語に対し不安やプレッシャー、回避といったネガティブな気持ちを指す継承語不安（HLA: Heritage Language Anxiety）（Sevinç & Dewaele, 2018）が見られた。Mさんの HLA が生じた理由には、相手からの「言語・民族・国家の結合意識に基づいた継承語能力への過度な期待・プレッシャー」である「継承語イデオロギー」（中家, 2024）が推察されよう。しかし、Mさんは大学進学後、継承語イデオロギーのない環境で HLA を感じずに継承語学習に専念することができた。以上の結果を踏まえた考察は、当日発表にて説明する。

注)

1) 本研究における「子ども」は、外国にルーツを持つ子どもの経験を有する人を指す。

【引用文献】

- 渋谷真樹 (2013) 「ルーツからルートへ ―ニューカマーの子どもたちの今―」『異文化間教育』37、pp. 1-14
- 土屋雅子 (2016) 『テーマティック・アナリシス法』ナカニシヤ出版
- 中家晶瑛 (2024) 「言語継承における継承語不安と継承語イデオロギー ―日本社会で継承語を継承しなかったニューカマー2 世の語りから―」『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』20、pp. 99-111
- 中島和子 (2016) 『完全改訂版 バイリンガル教育の方法』アルク
- Nakamura, J. (2016). Hidden Bilingualism: Ideological Influences on the Language Practices of Multilingual Migrant Mothers in Japan. *International Multilingual Research Journal*, 10(4), 308–323.
- Sevinç, Y., & Dewaele, J.-M. (2018). Heritage language anxiety and majority language anxiety among Turkish immigrants in the Netherlands. *International Journal of Bilingualism*, 22(2), 159–179.